

創意工夫にあふれた2学期でした

学校長 杉森 伸吉

令和3年度の2学期も、おかげさまで無事に終了いたしました。日頃のご協力に、心より御礼申し上げます。

昨年の2学期は、コロナ禍の下で、様々な制約を受けながら、いかに例年と同等又は同等以上の学校活動を効果的に行えばよいか、という課題と向き合う日々でした。その中で、運動会やきくまつり、きくのご覧覧会の実施方法も工夫したため、今年度の2学期は、様々な行事を、より工夫させ、充実した形で行うことができたのではないかと思います。

各学年の児童たちも遠足や社会科見学などを実施することができました。宿泊行事に関しては、実施できなかったものもありましたが、例年にはない活動を取り入れるなどして、日帰りではあっても例年以上に充実した活動にできたのは、子どもたちと先生の創意工夫によるところが大きかったと思います。運動会も、昨年同様にライブ配信をいたしました。カメラを1台しか使えない業者さんだと見ごたえが減ってしまうので、カメラを複数台使って中継できる業者さんにこだわり、業者さんの都合から、10月10日となりました。きくまつりは、昨年よりもお子さんの団を近くから見ることができ、かつ子どもたちも調理活動がしやすいように適度な距離をとる工夫など、昨年の反省も生かし、また昨年できなかった大泉音頭や菊の鑑賞会も実施することができました。運営委員の児童と先生たちの協同の成果だと思います。こうした、昨年と比べて少しずつでも工夫や進歩を実感できるのは、私たちの自信になると感じます。生活団活動を通じた異年齢の人間関係の形成も、昨年度に比べて、さらに充実できたと思います。今後は、生活団の保護者同士の交流も、きくまつりなどの機会を生かして、より深めていければとも思っております。きくのご覧覧会も、鳥居先生のもとで、たいへん豊かな創意工夫や交流がみられました。

コロナ禍の生活も長引く中で、コロナウィルス自体も感染状況も変化しやすく不確かで、複雑かつあいまいな状況に、全世界がさらされております。そうした中で、感染状況も国によって異なりますし、対応も国や文化で異なっており、リスクに対する考え方や感じ方、反応の仕方には、如実に文化が反映されると思います。デンマークに生まれ、日本に住んでいる文化人類学者のPeter Pedersen (ピーター・ピーダーセン) さんという知人は、日本と欧米の比較として、内在化(internalization)、外在化(externalization)という単純な対比を用いています。日本人は、個人の外部にある社会の規範を、自分の中に落とし込んで内在化することは得意だが、自分の中にある独自の考えや欲求を外部に出して社会に反映させる外在化は弱い、といいます。逆に、欧米の人たちは、外在化は得意だが、内在化は苦手なので、ルールに従うよりも、自分がやりたいように行動しやすく、日本人は自粛警察になってでも社会規範に従おうとする、ということです。こうした文化の違いはどこから来るのか、不思議ですね。

冬休みには、ご家族ともども今年一年の疲れをいやすとともに、新年での飛躍を目指してエネルギーを蓄えられて、新学期には元気な笑顔の菊の子たちに会うのを楽しみにしております。